神戸〈ゆうゆうの里〉入居者インタビュー

「60代の今、穏やかな暮らしを手に入れて」

内藤（ないとう） 明美（あけみ） 様（67歳）

「母と娘の二人三脚の人生」

人生の大半を母とふたりで暮らしてきた。母は私を産んだ後、理由あって離婚。実家に帰った。祖父母はよくしてくれたが出戻りは世間の目が冷たい時代で、母の兄弟や従妹からすれば私達は余計ものだった。従妹からこんなことを言われたと泣きながら訴えても、いつも母からは「ガマンしときや」が返ってきた。国鉄で働いていた母は、持っている服は1枚だけ。夜のうちに洗濯し、朝それを着て出かけていた。中学生になってから、母娘だけの二人暮らしを始めた。夕食の用意や家事は私の役。それぞれが忙しく殆ど会話もないが、不思議に寂しいとは思わなかった。高校生のときのお小遣いはひと月500円。買いたい物も別になく、家事があるので寄り道もしない。少しずつ貯めていった。母が定年の頃私が働けるようになり、今度は母が家事の担当。「いつかきっと良いことがある」とずっと信じて、ふたりで助け合って暮らした。私が結婚したときは、母もとても喜んでくれた。しかし、夫がくも膜下出血で倒れ、結婚生活5年で他界、3人の生活から再び母娘ふたりの生活に戻った。その後母の胃ガン、私の甲状腺や椎間板ヘルニアの手術など闘病生活になり、頑張る日々がまた続いた。

「60代で入居を決断」

お揃いのコーディネートです

そんな時、大阪フェスタを知り気軽に参加してみた。初めて様々な施設があることを知り、説明を聞いているうちに「これは60代でも他人事ではないぞ」と焦ってきた。私は学級数が15クラスあった団塊の世代。絶えず競争だった。もし何年か先に入居するなら、自分が良いと思うところに入れないのではないか、また今の生活に車は必要だが、いつまで運転できるだろうか、等々考えてしまった。施設に関する本をたくさん読み、見学する時のポイントも研究した。その結果、ここが大変気に入りしっかり納得もできた。ひとりで生きていく私のことを母は大変心配していたので、母の入居と同時に私も入居することを決めた。

「今からもっと幸せに」

入居して一番良いことは、困った事があっても絶対だれかがいてくれること。人生で始めて人に頼れる安心を実感している。またアスレチックジムも気に入っているし、入居者みんなが同じ屋根の下にいるので話が合う。以前、私50歳、母80歳の時、思い切ってふたりで初の海外旅行に出かけた。それ以来オーストラリア、カナダ、ハワイ、ヨーロッパ等々毎年出かけ、来年はどこに行こうか、と楽しみになり生活の張りになっていた。旅行は大好き。荷物を詰める時からワクワクして、飛行機の離陸のときの引っ張られる感じも、入国した国の甘い匂いやほこりっぽい匂いなど想像するだけで嬉しくなる。今は留守の心配もないので、これから行けるだけ行こうと思っている。「いつかきっと良いことが」が本当になり、今、私が日々に感謝でき穏やかに暮らせていることを母も喜んでくれている。

いつも手をつないで